

## 第十四章

政治的真理をめぐるゴドウィン氏の五命題——彼の全著作が拠って立つ根幹だが、なお立証されていない——人口原理がもたらす窮乏に照らし、人間の悪徳と道徳的弱さは決して根絶できないとする根拠——ゴドウィン氏の意味での「完全化」は人間には当てはまらない——人間における真の完全化の性質の解明

前章の論証が妥当であるとしても、「人間の自発的な行動はその人の判断によって決まる」という命題からゴドウィン氏が導く政治的真理の帰結が、なお十分に裏づけられたとは言いがたい。要点は、第一に、健全な推論と真理が十分に行き渡るかたちで共有されさえすれば誤りは常に退けられること、第二に、その種の推論と真理はどのような水準で伝達しうること、第三に、真理は圧倒的な力を持つこと、第四に、人間の悪徳や道徳的弱さは克服不可能なものではないこと、第五に、人間は完全になりうる、すなわち不断に改善しうるということである。

冒頭の三つの命題は、一つの完結した三段論法をなしている。「適切に伝達される」を、行為を促すに足る確信が形成されることと理解するなら、大前提は成り立つが小前提は成り立たず、その結果として結論たる真理の全能は退けられる。他方、「適切に伝達される」を、理性的な把握としての確信にとどまるものと理解するなら、大前提は否定され、小前提は証明できる場合に限ってのみ真となり、結論も同様に崩れる。第四の命題は、ゴドウィン氏によれば表現にわずかな差こそあれ直前の命題の繰り返しであり、したがって直前の命題とともに退けられる。もっとも、本書の主論点に照らせば、現世において人間の悪徳と道徳的弱さが決して完全には克服されないとみなす具体的な理由を、個別に検討しておく意義はなお残されている。

ゴドウィン氏は、人間は生命が宿った瞬間から絶えず受け続ける一連の印象の蓄積によって形づくられると述べる。そして、人が悪い印象や悪影響をまったく受けない環境に置かれるなら、そこで徳が成立するかどうかはともかく、少なくとも悪徳は排除されると主張する。氏の『政治的正義』の趣旨は、多くの悪徳や弱さが、不公正な政治や社会制度に由来しており、それらを取り除いて理解が深まれば、悪への誘惑はほとんど消える、というものである。しかし、制度の有無にかかわらず自然の不変の法則が働いた

め、人類の大半は欠乏に起因する誘惑やその他の情念に絶えずさらされることは、すでに明らかである。この前提に立つなら、たとえ同氏の人間観を採用したとしても、そのような印象とその結びつきが世界に存在するかぎり、多様な悪人が生まれるのは避けられない。性格形成に関するこの構想に従っても、この条件のもとで人類すべてが徳に満ちるようになる見込みは、サイコロで六の目が百回連続して出ると同程度に起こりにくい。振るたびに変わる出目の組み合わせの多様さは、各人が存在の初めから受けた印象の結合によって人物像が定まるとするなら、世界に必然的に現れる性格の多様さをよく映し出す比喩である。この比喩は、例外が一般原則に取って代わること、極めて稀な組み合わせが頻出すること、すなわち、歴史の各時代に見られる卓越した徳の個別例が支配的になることを期待するのが、いかに不合理であるかを示している。

ゴドウィン氏は、この比較には一点、不正確なところがあると主張するかもしれない。サイコロでは出目を左右する要因、すなわち偶然性の幅は常に一定であり、次の百回で六の目が直前の百回より多く出ると期待する合理的根拠はない、というのである。他方で、人間は性格形成の要因にある程度介入することができ、善良で徳に富む人物が一人現れれば、その必然的な影響によって、同様の徳を備えた人物がさらに生まれる可能性

はむしろ高まる。サイコロは六が一度出ても、次に六が出る確率は上がらないのとは対照的だ。私は、この異議が比較の核心を突いていること自体は認めるが、その妥当性は限定的だと言わざるをえない。経験の蓄積は、もともと徳の高い人物の感化ですら、きわめて強い悪の誘惑にはめったに打ち勝てないことを示している。感化は一部の人々には及ぶが、その影響が届かない者のほうがはるかに多いのである。もし、人間の努力によってこうした誘惑を取り除きうることを氏が実証しているなら、私はこの比較を退け、腕の振り方のコツさえ会得すれば毎回六を出せると認めることさえやぶさかではなかっただろう。だが、性格を形づくる多くの要因が、腕の精妙な動きと同じく人間の意志から独立しているかぎり、世界の将来における徳と悪の比率を見積もろうとするのは愚かでうぬぼれた企てであるとしても、人類の悪徳と道徳的弱さは全体として克服不可能であるとは断言できるのである。

第五の命題は前四命題から導かれる総括的な結論であり、土台が崩れた以上、この命題も維持できない。ゴドウィン氏の言う「完全化可能」を文字どおりに受け取るなら、先行する命題が明確に立証されないかぎり、人間が完全化可能であると断言することはできない。他方、この語を、人間には常に改良の余地があり、歴史上、到達し得る完全

の極みに至った時代も、いずれそうした時代が訪れる見込みも存在しない、という意味に解するなら妥当である。ただし、そこから直ちに、改良への努力が常に成功するとか、人類が多くの世代にわたり並外れた前進を続けるといった結論が導かれるわけではない。言いうるのは、改良の正確な限界は原理的に知り得ない、という一点だけである。ここで強調しておきたいのは、無制限の改良と、限界があらかじめ定まっていない改良とは、本質的に異なるということである。前者は現在の人間本性の法則のもとでは成り立たず、後者は成り立つ。

筆者は前にも述べたように、人間の向上可能性を植物の品種改良になぞらえている。意欲的な園芸家の目標は、大きさ、形の均整、色彩の美しさを、バランスよく高めることである。そして、たとえ改良の名手であっても、これらの要素が究極の水準に達したカーネーションを手に入れたと断言することはできない。どれほど見事な花であっても、手入れの仕方や土の性質、日当たりが変われば、さらに優れた花が生まれる可能性は常に残されているからである。

しかし、自分がすでに完成の域に達したと考えるのは不合理である。花の現在の美しさがいかなる手立てによって得られたかを知っていたとしても、その同じ手立てを一層

強めて施せば、さらに美しい花が得られると、必ずしも言い切れない。一つの特性を高めれば、別の美点を損なうことがあるからだ。草姿や株を大きくしようとして肥えた土を与えれば、萼が裂け、対称はたちまち崩れかねない。同様に、人間の精神により大きな自由と活力をもたらそうとしてフランス革命を促した強すぎる肥料は、人類の萼、すなわち社会を束ねる抑制の絆を断ち切ってしまった。個々の花卉がどれほど大きく育ち、いくつかがいかに力強く、また美しく印象的であっても、全体としての現在の姿には結束も対称も配色の調和もなく、緩み、ゆがみ、ばらばらの塊にとどまっている。

たとえナデシコやカーネーションの品種改良が重要な意義をもつとしても、それをキヤベツのように大きく育てることはほとんど望めない。それでも、試行を重ね、段階的に粘り強く取り組むなら、現状よりも美しい品種や出来栄を生み出せる可能性は高い。人類の幸福を高める意義は言うまでもなく、この分野では、小さな前進や改善でも価値は極めて大きい。ただし、人類を対象とする試みは、無生物を相手にする実験と本質的に同じではない。一輪の花が散ったり傷んだりしても、やがて別の花が咲くだけであるこれに対して、社会の結び目や絆が断たれるような断絶は、数千人に深い痛みをもたらす、その傷が癒えるまでには、長い歳月と多くの不幸が積み重ならない。

である。

これまで検討してきた五つの命題は、ゴドウィン氏の空想的構想の中核をなし、その著作全体の意図を集約し、全体としての目標と方向性を示している。個々の論証には見るべき点が少なくないものの、構想の中心的目的を達成するには至っていない。人間の複合的な本性に由来する困難は解消されず、人間と社会の完全化に対する主要な反論も、同氏の論証によって覆されていない。筆者の判断では、この反論は、人間の広い意味での完全化にとどまらず、社会の形や構造を大きく改め、多数を占める下層階級の生活条件を明確かつ大幅に改善するような変化に対しても、決定的な妥当性をもつ。仮に筆者が千年の寿命を与えられ、自然法則がその間不変であったとしても、長い居住の歴史をもつ国においては、富裕層がいかに大きな犠牲や努力を払おうとも、共同体の下層の人びとを、アメリカ合衆国北部諸州の三十年前の一般庶民と同程度の境遇に、持続的にとどめておくことはできないという自説が、経験によって覆されるとはほとんど危惧していないし、そのことを望みもしない。

将来、欧州の下層階級が、今よりはるかに充実した教育を受け、わずかな余暇を酒場以外の有益な選択肢に費やす術を学ぶようになる可能性はある。また、各国がまだ到達

していない水準の、公正で平等な法のもとで、よりよい生活を営めるようになる可能性もある。見込みは薄いとはいえ、余暇そのものが増える展開も全くあり得ないわけではない。しかし、全員が早く結婚し、多くの子どもをたやすく養っていけると確信できるほどの賃金や生計の手段が、等しく行き渡るようになることは、道理に照らせばまず望みがたい。